

Living the Lotus 2

2024

Buddhism in Everyday Life

VOL. 221



立正佼成会 バンコク教会

Living the Lotus Vol. 221 (February 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。



「恥じること」は、
善く生きること

立正佼成会会長 庭野日鏡

人間の基本

冬から春へと移り変わるこの時季の節分といえば、家のなかで「鬼は外、福は内」と唱えながら、炒った福豆をまく「豆まき」が日本の伝統行事として知られています。体調をくずしやすい季節の変わり目に、病をもたらす疫鬼えききを払って息災を願う行事ですが、私たちは疫鬼とともに貪・瞋・痴といった心をまどわす邪鬼じやくきをも払って、身心ともに健やかに、うららかな春の日を迎えたいものです。

ところで、同じ「心の鬼」でも、それを一文字で「愧き」（りっしんべんに鬼）と書くと、意味あいが変わってきます。こちらのほうは、むしろ払ってはいけない心、私たちがけっしてなくてはならない心といえるものです。それは、自分の言動の過ちや至らなさに気づいて恥じる心です。

「慚愧ざんき」という言葉がありますが、この愧きはもちろん、慚も「恥じること」を意味し、浄土真宗の親鸞上人は、信仰的な受けとめ方でより深く、この言葉の意味を説いておられます。慚とは自らの罪を恥じること、愧きとは人に自らの罪を告白して恥じ入ること。また、慚は人に対して恥じることで、愧きは天に恥じることだということです。そのうえで親鸞上人は「無慚愧むざんきはなづけて人にんとせず」といわれます。

恥じる心がないのは、本能のままに生きる動物と同じでけっして人とはいえない、恥じる心があればこそ、人が人として敬意や節度をもって生きることができ、人間関係も社会も成り立つということだと思います。「恥じること」は、いわば人間の基本条件といえるのです。

恥じることで救われる

では、私たちは何に対して「恥じること」が大事なのでしょうか。親鸞上人は「自らの罪を恥じる」といわれますが、罪とはどのようなことだと、みなさんは思われますか。

「恥を知れ」という言葉を、人を非難するとき、その相手に向かって使う人をときおり見かけますが、この言葉は自分自身に向ける言葉だと思うのです。「恥を知れ」と内心で自分につぶやけば、ときに「私はいま、思いあがっていないだろうか」と謙虚さをとり戻したり、「欲望まるだしなのではないか」と反省したり、あるいは「家族に顔向けできないことをしようとしているのではなかろうか」とやましい行ないを思いとどまるかもしれません。

私たちは「恥を知る」ことによって、日常生活のなかで知らず識らずに犯している罪から救われるということです。自分を苦しめたり、人を傷つけたりしないですむのです。

「人間は恥ずる心を養いさえすれば、どうにか救われる」
せきかく 碩学として知られる安岡正篤師の言葉ですが、私なりにいえば、恥を知ると、人は「真人間」まにんげんに生まれ変わります。しかも、恥じる心は仏性と同じでだれにもあるので、恥を知る限り、人はいつまでも成長しつづけられるのです。

恥じることを心にとどめる。その心得を説くように、「つねに善き友に会って心はずかしめられよ」といわれたのは浄土宗の法然上人です。釈尊は、善き友は仏道のすべてといわれましたが、家族をはじめとする身近にいるサンガは、いつでも自分のことを見守っていてくれる人です。ですから、恥ずべき行ないは諫めてくれるでしょうし、私たちが愛する家族や仲間の前で恥ずかしい生き方はできません。サンガという善き友によって、私たちは自然に「はずかしめられる」のです。そうして心田が耕され、恥じることができるのは、サンガもまた仏さまだからです。

一方、社会や世界はいま、欲望と憎悪に満ち、人間らしい「恥」を忘れたが如き危うい情勢にあります。「恥」の字源は「懼れ」おそですが、私は人が神仏を敬しておそれ、恥を知って生きることの大切さを強く思うのです。

(『佼成』2024年2月号)



Interview

ブラジル全土に法の華を咲かせたい

ブラジル教会長 佐々木マリア浩身

ブラジル教会長に就任した今のお気持ちを聞かせてください。

正直に言うと今、とても緊張しています。でも、それ以上に新たな扉を開けるような期待感からワクワクした気持ちでいっぱいです。

ブラジルは開祖さまが1958年に日本人移民50年祭で訪れ、その翌年にハワイとロサンゼルスに支部(当時)が発足したことから、いわば本会の海外布教の出発点と言えます。そうした点を踏まえて何か感じることはありますか？

わが家では祖母が立正佼成会に入会して、私は信仰3代目なんです。また父は1958年に佼成学園を卒業してすぐブラジルに渡ったのですが、その年に開祖さまが日本人移民50年祭でサンパウロに来られ、わざわざ父の働いていた会社の寮を訪ねてくださったのです。私がまだ生まれる前にそのような不思議な出来事があったこと、また今回、お役を拝命するに際して、「私はブラジル教会でお役をさせていただくためにブラジルで生まれ育ったのではないか」と感じ、命をつないでくれた祖父母や両親、そして開祖さま、会長先生の教えに遇い得たことに改めて感謝するとともに、これからブラジルの地で精いっぱいこの法をお伝えさせていただきたい——そう自分自身の因縁・使命をかみしめさせていただきました。



昨年の教会式典で前任の仲原教会長の通訳を務める佐々木教会長



ブラジル教会発足50周年記念式典の際に教会道場にて

1971年ブラジル生まれ。信仰3代目。サンパウロのマッケンジー大学卒業。その後、立正佼成会学林本科で学び、1998年に卒林。2年間、東京の大田教会に布教員として勤務した後、ブラジル教会布教員、2012年からはブラジル教会教務部長を務め、2023年12月にブラジル教会長に就任。

ご両親の言葉や行動から学んだことはなんですか？

父の後ろ姿、特に親孝行ということを学びました。父は幼いころから祖母に「親孝行な子になるんだよ」と言われて育ったようです。実際、父は家庭で祖父母のことをとても尊敬し、大切にしていました。その後ろ姿を見て育った私も小さいころから「親を敬い大事にする親孝行って素晴らしいな」と自然に思えるようになったのです。そしていつしか私自身、両親とともに毎週日曜日にブラジル教会に行くのが好きになり、まるで道場が遊び場のような感じでした。

ご自身としては何がきっかけで本格的に活動するようになったのですか？

私が青年部活動に出るようになったきっかけは1993年、本部で行なわれた大学生サマーセミナーに参加したことです。当初は言葉の問題もあって参加することに少しためらいがありました。でも、当時の教会長さんに「本当に佼成会を知るには絶好のチャンスだよ。日本での体験はきっと人生の宝になるよ」と言われ、サマーセミナーに参加したのです。教会長さんのお言葉どおり、セミナーではさまざまな体験をしました。

特に開祖さまの生誕地である菅沼を訪問したときには、道場で初めて導師のお役をさせていただいたんです。

そのころは日本語がまだ上手ではありませんし、経典を読誦するのも不安と緊張でいっぱいでしたが、ご供養中、仏さまが《心配ないよ、大丈夫だよ》と後押ししてくださっているような声が聞こえたんです。とても不思議な貴重な体験でした。

また、学林生との交流もとても楽しく有り難く、そのときのふれ合いがきっかけとなって、私は仏教や法華経をもっと深く学びたいと思うようになり、2年後の1995年に学林本科に入林させていただきました。学林生活の中では時として同期の仲間と軋轢が生じることもありました。そうした体験をとおして、「縁によって自分を見つめる修行」ということを学び、私にとって学林での3年間は法華経を研鑽するとともに、自分の心と向き合い、自分自身の考えや言動を厳しく省みる「内省」と「気づき」の時間だったのでないかと思えます。



ブラジル教会の会員宅にてサンガと共に



ブラジル教会長就任式での読経供養

教会では現在、どのような活動をしているのですか？

私はこれまで教務員や教務部長など主に教会スタッフとして、根本仏教や法華経の勉強会の講師をさせていただきました。20年前からは一般市民に広く門戸を広げようと、教会長さんが講師となって「仏教セミナー」を実施しており、私は通訳を務めさせていただいています。このセミナーは仏教用語を一切使わずに、開祖さまのご法話を活用して、「まず人さま」「自分が変われば相手が変わる」といった初心者にもわかりやすい内容で開催しています。

また、教会の幹部さんが中心となって約30年前から喘息治療サービスを社会奉仕活動の一環として行なっています。サンパウロは大気汚染の影響で喘息に苦しむ子どもがとても多いんです。現在、ボランティアで5人の未会員の整体師さんが0歳から13歳の子どもたちを対象にして、教会道場を開放して喘息になった子どもに頸椎のツボのマッサージ治療を施していますが、4～13歳ぐらいまでだったら完治可能といわれています。

それから毎年7月にはブラジルと日本の文化の相互理解の促進と地域との交流を目的として、「農業収穫祭」を教会敷地内で開催しています。日本の焼きそばや天ぷら、ブラジルの代表的な料理であるシュラスコなどの模擬店を出店して、教会周辺の一般市民から好評を得ています。

法華経の中で支えにしている経文はありますか？

普賢菩薩勸発品の「四法成就」の教えにある「諸仏に護念せらるることを為」という一節です。私たちが「仏さまに生かされ、護られているんだ」という絶対の信念を持つことができれば、たとえ人生においてどんな困難な状況に遭遇したとしても、すべての現象、出来事を仏さまの慈悲、学びの機縁として感謝で前向きに受けとめられると思うんです。この「四法成就」を、仏さまが私たち法華経を实践する者に対する力強い励ましの説法として心の支えにさせていただいています。

開祖さま、会長先生の教えで心に刻んでいるものを教えてください。

開祖さまからは「まず人さま」、会長先生からは「自らの心田を耕す」というお言葉を日々の修行の中で大切にさせていただいています。

今後の抱負、将来の夢を聞かせてください。

これからは学林に多くの青年を送り出して、次世代の後継者となる人材の育成に力を注いでいきたいと思っています。また、今年是我们会員が念願としてきたポルトガル語版の『法華三部経』が完成する予定です。この『法華三部経』をブラジル布教の新たなスタートの基盤に据え、多くの人びとの幸せのために教会一丸となって布教伝道に邁進し、ブラジル全土に法の華を咲かせたい——それが今の私の夢です。



ブラジル教会長就任式のあとで会員と共に（最前列中央）



まんが 立正佼成会入門

会員になったら

佼成少年少女のちかい

少年部には「佼成少年少女のちかい」があり、少年部員としての心構えが示されています。

私たちは
仏さま神さまを敬い
人には親切
礼儀正しく
親孝行な子になります



また、少年部だけでなく、全会員が食事の前に唱える「食前感謝のことば」があります。

仏さま、自然の恵み、
多くの人に感謝していただきます

食事をいただけるありがたさに
感謝してお唱えします。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。

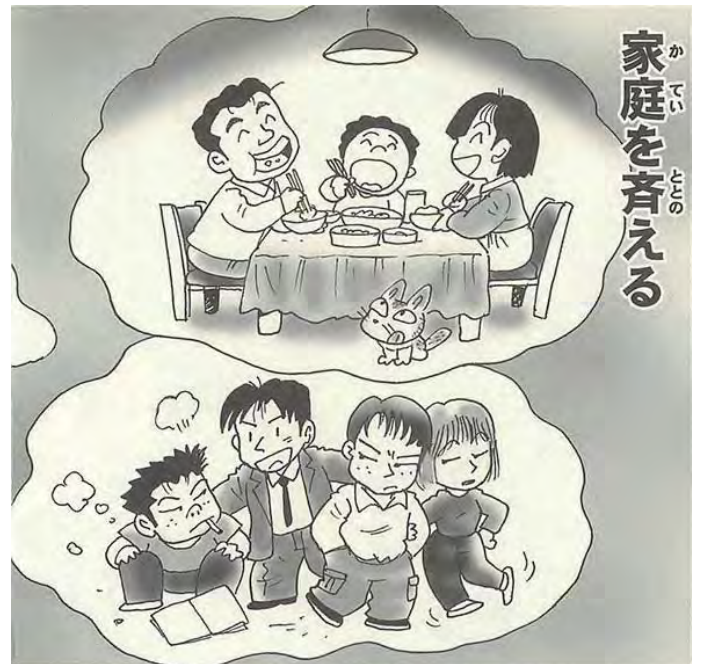
<https://www.koseishop.com/>

家庭を斉える

家族の間での事件が多く発生しています。いまこそ家庭の役割を見直さなければなりません。立正佼成会では、ぬくもりのある家庭づくり「齐家」に取り組んでいます。

会長先生は家を斉えていくことは、人づくりであり、世界平和そのものにつながっていくと語り、ご宝前を中心とした家庭を築いていくことの大切さを指導しています。

具体的な行動としては、「会長先生の教え」の項(『Living the Lotus』2022年5月号)でふれた「三つの実践」です。



● 豆知識

「齐家」は中国の思想書『大学』に出てくる言葉で、「修身齐家治国平天下」(身修まりて而るのち家斉う。家斉うて而るのち国治まる。国治まりて而るのち天下平らかなり)による。



人に説いて自分が悟る
「人びとの幸福のために説け」

立正佼成会開祖 庭野日敬



このことは、私たち法華経を信奉する人間の我田引水の説のように聞こえるかもしれませんが、けっしてそうではありません。

十七年前(昭和五十年)でしたが、日本の仏教学界の最高峰のお一人であった宮本正尊先生が、立正佼成会の創立記念日での祝辞のなかで、「法華経が『諸経の王』で

るゆえんは、お釈迦さまの『伝道宣言』を十回も引用してあるところにあります。ほかの経典は、まったくそれにふれていません」というお話をされました。

「伝道宣言」というのは、お釈迦さまが鹿野苑で五人の比丘に最初の説法をされたあと、お弟子の数が六十人に達したときに、早くも布教・伝道の宣言をされたことをいいます。お釈迦さまはこう宣言されました。

「比丘たちよ。私はいつさいの束縛から解放され、そなたたちもいつさいの束縛から解放された。比丘たちよ、多くの人びとの利益と幸福のために、諸国をめぐり歩くがよい。一つの道を二人して行かぬがよい」と。

弟子たちはお言葉のとおり、別れ別れになって布教・伝道の旅に出て、お釈迦さまもお一人で、マガダ国の王舎城へと向かわれました。

そういえば、法華経にはいたるところで「人のためにこの法を説け」「後世のためにこの経を説き広めよ」と説かれています。というのは、そのような菩薩行によってこそ、世の救い、人類の救いが実現するからです。

立正佼成会は、このお釈迦さまの「伝道宣言」をそのまま継承しているのです。多くの宗教教団では、おおむね専門職が「法」を説き、布教をしているのですが、立正佼成会では「入会即布教者」を合言葉に、「一人が一人を導く」ことを実践しています。これが、「一人ひとり別の道を行きなさい」というお釈迦さまのお言葉を忠実に実践していることになるわけです。

佼成会も創立当初は、人びとを「貧・病・争」から救うことが主でしたが、現在は先ほどお話したような、人類生き残りのための大事業を日々行なっているのです。そのことを片時も忘れないでほしいものです。

「一人が一人を導く」というのは、会員の一人ひとりが、日常にふれあう人たちに教を説いて、救いの手をさしのべることです。

大乘仏教は、お釈迦さまがご一生に説かれた数多くの教を、後世の学僧たちがきちんとした体系にまとめたものですが、もともとは、お釈迦さまがふれあう一人ひとりの苦しみに対して、ケース・バイ・ケースで教え、導き、救われた、具体的な「救い」の教えなのです。

ですから私たちも、一日一日の出会い、ふれあいをおろそかにしてはならないのです。目の前に現われたすべての人が、「救い」の対象であるといっても過言ではないでしょう。

Director's Column

「恥じる心」から学ぶ

国際伝道部長
赤川 恵一

日本では元日に発生した能登半島地震に続き、翌日には羽田空港で民間航空機と海上保安庁の航空機の衝突事故が起きるなど、大惨事に見舞われる年明けとなってしまいました。震度7の大地震によって民家が倒壊し、人命が奪われる映像がテレビに映し出されるたびに、胸が締め付けられる思いがしました。本会では教団を挙げて震災に対応する取り組みが始まり、全国的な支援の輪が広がっております。亡くなられた方々のご冥福を衷心よりお祈りし、一日も早い被災地の復興を願わずにはられません。

さて、2月の会長法話では、本年の年頭法話に盛り込まれていた「敬と恥」の概念から、「恥じる心」が取り上げられました。会長先生は四半世紀前から継続して「心田を耕す」大切さについてお話をされていますが、今年は毎月のご法話をとおし、「心田を耕す」をテーマに、さらに詳しくその意義と方法を教えていただけるものと期待しています。会長先生は、「恥じる心」は仏性と同じく誰もが持っているもののご指摘くださいました。その言葉を謙虚に受け止め、法華経を生きる一年にしたいものです。



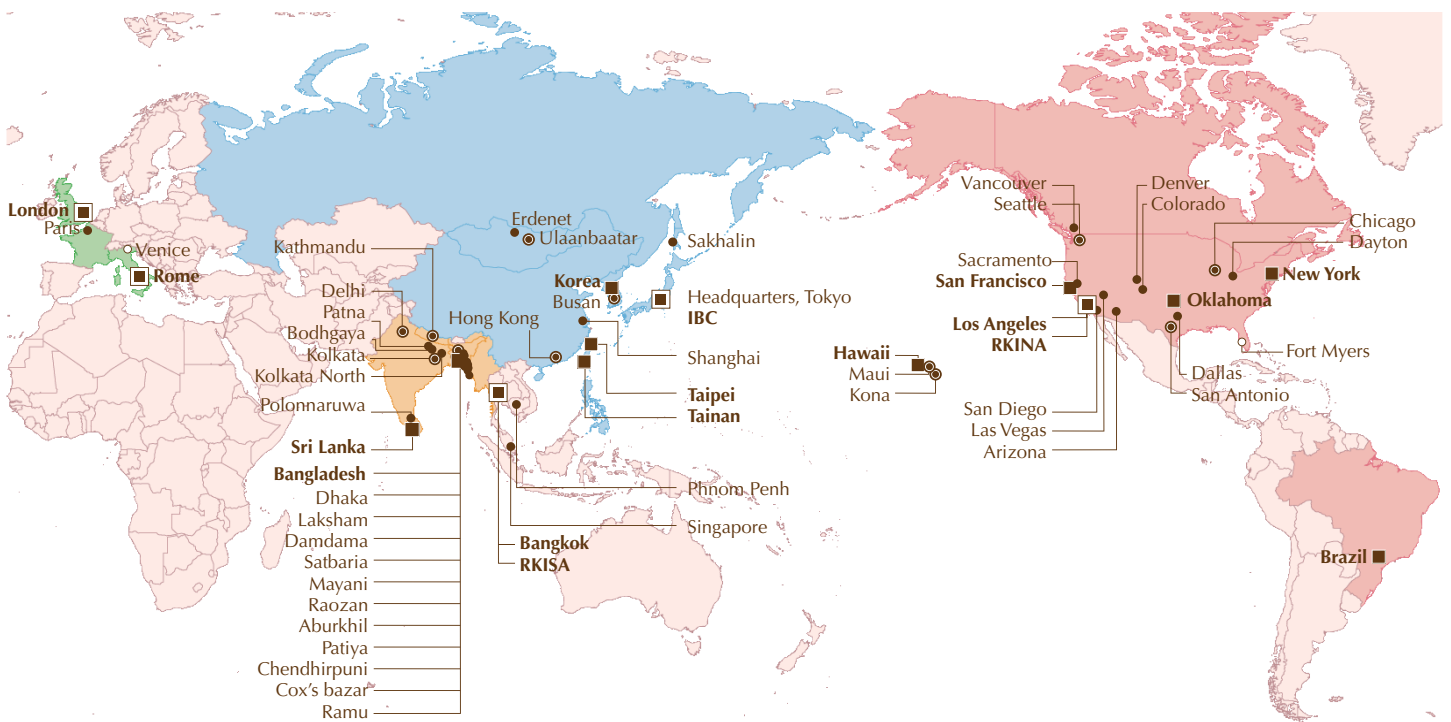
2024年1月10日、韓国教会釜山支部の交流会に出席した赤川部長（前列右から3番目）

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



twitter



✉ Living the Lotus では、皆様のご意見・ご感想を募集しています。
 お問い合わせは、以下の E メールアドレスにお願い致します。
 E メール : living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp